文献と実物資料

―『故紙堆』（北京図書館出版社　二〇〇三）の紹介を通して―

森田憲司

二〇〇三年に北京図書館出版社から出版された、『故紙堆』という本がある。『漢語大詞典』に用例として引かれている、朱子の「答呂子約書」には、「今日正要清源正本以察事変之幾微、豈可一向汨溺於故紙堆中、使精神昏弊、失後忘前、而可以謂之学乎」とあるから、タイトルの『故紙堆』とは、「古本の山」という意味になろうか。しかし、張海鵬氏の序が言うように、この本の場合は、「紙屑の山」とでも訳したほうがいいだろう。[1] それは、決して本書を貶めてそう表現するのではない。収録されているのが、印刷、手書きに限らず文字の書かれた各種の紙類で、その多くが一枚物であるからである。前言にも書かれているように、そこには、漢民族に伝来してきた「敬惜字紙」の気持ちを感じ取ることができる。鮑氏自身も次に紹介する著書、『清風閲覧故紙堆』（北京図書館出版社　二〇〇三、以下「清風」と略）の最初の文で、「敬惜字紙？」と題して、本書丙集所収の「呂祖師惜字歌」を紹介している。

『故紙堆』の著者名標記は「本書編委会（編集委員会の略）編」となっているが、収められている文献は、主編の一人である鮑伝江氏が個人で収集したものである。すでに引いたように、鮑氏には『清風閲覧故紙堆』と題した文集があり、このような紙類の一つ一つを取りあげて紹介しているが、取りあげられている資料には、本書と重なるものが多い。氏は、一九五五年生まれの美術家のようで、「清風」の冒頭に、中央美術学院在学中に琉璃廠で買った本の間に咸豊年間の税票が挟まっていた話が出てくるが、これが紙類収集のきっかけになったと書いている。[2]

本書は、図版はすべてカラー、甲集から癸集まで全一〇巻で、書価は一セット九八〇〇元と、かなりの高額図書である。これも前言によれば、収録されているのは全部で二八〇〇件だという。まず、全一〇巻の構成を紹介しておこう。

甲集　雑項・社会総類
乙集　雑項・社会総類、雑項・教育
丙集　雑項・民俗文化
丁集　雑項・司法、専項・執照（証明書）
戊集　専項・地契（土地契約書）
己集　専項・銭鈔（紙幣、通貨代用品）、専項・股票（株券債券）
庚集　専項・股票、専項・税単
辛集　専項・発票（領収書）、専項・煙標火花（タバコやマッチのラベル）
壬集　専項・広告商号（ラベルや広告の類）
癸集　専項・広告商号

※（　）内は、筆者の注記

さて、はじめの二巻の「社会総類」には、本書の対象全体から類型的なものを集めており、以後の各種の内容は、カッコ内に示したごとくである。もちろん多くを占めるのは、古銭紙幣、株券債券、マッチやたばこのラベルのような、従前からもコレクターズアイテムとして、一般的に収集の対象となってきた品々である。歴史研究者にとっては「史料」である地契の類にしても、現在では大量に古物市場に出現し、コレクションの対象となっている。北京城内の房契も市場では少なからず見かけるし、それ専門のコレクターもいるようだ（数百元といった恐ろしく高い値段がついてはいるが）。しかし、それ以外にも、本書には旧中国社会の日常にかかわる紙類が少なくない。とくに、「教育」に含まれている科挙や学校関係資料、「民俗文化」の婚礼葬儀関係や宗教関係のもの、「司法」の裁判関係文書などは、直接文献研究にもかかわりを持つ。税単や地契はいうまでもない。

なお、以上の各巻に収録されている資料の年代であるが、「敦煌経巻」が一葉あるほかは、明代の年記のあるものが若干含まれてはいるものの、多くは清朝中期以降のもので、文革期に及んでいる。各巻ともに項目ごとに年代順に配列されている。

筆者が、実物資料と書物の形に編まれた文献を読むという行為との関係という視点から、この『故紙堆』に注目したのには、次のような理由がある。

第一には、上にも書いた明朝から文革期までの各種の資料の実物標本としての価値であり、第二には、改革開放、経済発展の中で盛況を示している中国の古物市場との関連からである。

まず第一の点について述べると、中国史研究を大きく特徴付けるものの一つに、古文書の不存在ということがある。もちろん、長沙走馬楼をはじめとする簡牘、敦煌トルファン文書、黒城出土文書、さらには徽州文書、宮中檔など、各時代に個別資料群は少なからず存在し、また研究も盛んにおこなわれている。しかし、それはあくまでも特定の資料群であり、広く同時代史料が遍在するわけではない。

存在しないものはいたしかたがないのであるが、いわゆる「文書」に限らず文字の書かれた「実物」があるのとないのでは、編纂史料を利用するにあたっても、その内容理解に大きく差が生じるであろうことは、容易に想起されるところであり、せめてサンプルなりともあれば、という想いは、文献を読む者であれば、誰しも抱くのではないだろうか。筆者の研究に直接かかわる科挙を例にとると、秋田屋書店版の宮崎市定著『科挙』を読む者は、みな巻頭に掲げられた捷報の赤い色に強いインパクトを感じるだろう。[3] あるいは、各種の書物の図版にしばしば用いられる「盛世滋生図」の科挙の風景は、やはり文献を読む上でイメージを喚起してくれる。ましてや、各次の試験の問題や解答の実物が、もし身近にあれば、そこに書かれた文字が直接的に史料として利用できることはないとしても、その姿そのものが、文献を読み研究を進めていくにあたって、力となってくれるに違いない。

しかしながら、筆者が専門とする宋元時代の「実物」が、ほとんど存在しないであろうことは言うまでもなく、[4] たとえば、二〇〇三年八月に高知で開かれた、シンポジウム「中国宋明時代の宗族」において、明清時代のパートでの発表は、そのほとんどが徽州文書にかかわるものであったのに対して、宋元時代については、『清明集』や『元典章』など、文書形式を有するとはいうものの、あくまでも編纂物に収められた史料を用いたものであった。それゆえにこそ、編纂物を中心に所収の文書を集成した、『中国土地契約文書集　金—清』（東洋文庫明代史研究室編　東洋文庫

一九七五）や、中国の『中国歴代契約会編考釈』（張傳璽主編　北京大学出版社　一九九五）、の存在はありがたいのであるが、文書そのものの姿を知るという性格のものではないから、ここで話題としている、文献を読み進める際にイメージを喚起してくれるという役割を要求することには限界がある。

となれば、明清、あるいは民国時代のものであっても、そこからある程度のイメージを形成する材料となってくれることを期待することとなる。ただし、それにはすでに活字化された文書資料集の類では物足りない。とは言っても、もし文書の姿を見たいとなると、少し前なら、明治期に編纂された各種の調査資料集、たとえば、『台湾私法』の附属参考書や、さらには実業関係の書物（東亜同文会の『支那経済全書』が代表的なものであろうか）などを参照するのがせいいっぱいであった。実物文書の姿については、国内にかなりあると思われる台湾の文書はいざしらず、[5] 中国本土については、徽州文書についてこそ、『徽州千年契約文書』二〇巻（花山文芸出版社　一九九一）があるが、その他の地域については例外的なものしか目にすることができなかった。ところが、最近では、『北京房地契証図集』（傅増傑他編　中国奥林匹克出版社　一九九六）のような図録や、『清代北京城区房契研究』（張小林著　中国社会科学出版社　二〇〇〇）や『清代上海房地契档案彙編』（上海市档案館編　上海古籍出版社　一九九九）などのように、古文書についての現物を踏まえての資料集や研究書が出現するようになってきた。つまり、文書の実物が姿を現しつつあるのである。

こうした状況をふまえて、『故紙堆』の特色を見てみよう。もちろん、学術資料集として編まれたものではなく、趣味の収集の図録であるから、これまで紹介してきたような資料集の類と一緒にすること自体が不適当であると言ってしまえばそれまでであるが、どの程度の有用性があるかを見ておくことは意味があると考える。

まず挙げるべき特徴は、採録対象の多様さであろう。

地契、執照や税単などの巻は、対象自体が資料図録としての意味を有しているので、ここでは、丙集の民俗関係資料の一部を、本書での命名によって列挙してみると、過継文契、婚書、蘭譜、魚鱗図、遺嘱、訃状、引状、墓図、分単、烈女呈報、家譜、さらには命相文件、租房契約、行船清単、捷報、会書、などなどである。人生のさまざまな場

面にかかわる紙類が収録されていることがご理解いただけるであろう。

こうした収録資料を見ていくと、「事文類要啓劄青銭」や「事林広記」、「翰墨全書」の世界を実物で見るような感じを、宋元時代の研究者としては、ふと持ってしまう。もちろん、本書に収められた紙たちは、偶然の機会に収集されたものであるから、簡単な分類はされていても、なんらの体系性もそこにはない。したがって、こうした書物と比べることは不適当であるし、資料的意味を見出しがたいという考え方もあるであろう。そもそも歴史学の原則からすれば、『故紙堆』に収められた資料のような、市場に流入し、その原状がわからないものは、資料としての価値がはなはだしく劣るとされる。さらに言えば、ばらばらになってしまった税単や執照が一枚だけ存在していても、よほどの史料的価値のある文言や事例がその中に見出されなければ、単なる「故紙」にすぎないと指摘されるであろう。

しかし、これまでも書いてきたように、中国における文書の残存状況全体を考えると、そうとばかりは言っていられないし、これらの紙々が過去の中国のある時点で現実に用いられたものであることだけは、たしかなのであり、彼の地に生きた人々の数千年の営みの各場面で作成されてきた「紙」と、そこに書かれてきた文字の、言語とその形式を知り、実感することは、その種類を問わず、我々が文献を読んでいく際に手がかりとなりうるものであると、筆者は考えている。

『故紙堆』に収録された資料には、これまでの内容紹介でも触れたように、「文書」という語にすぐ結びつく房契地契の類のみならず、宗教関係や社会関係（婚姻、相続、宗族や祭祀など）にかかわるもの、さらには広告なども含まれており、このように多様な資料を集めた図録としては、台湾で二十年以上前に出版された『台湾公私蔵古文書影本』一～一〇輯（王世慶他編　美国亜洲学会台湾研究小組　一九七七～八三）が、それこそお札や帳面までコピーで集成したものであるが、それくらいしか思いつかない。[6] 同書も限定された機関しか所蔵していないのではないだろうか。書名は失念したが、戯劇関係で、プログラムやチケット、唱本などの図版を集めた資料集があったような記憶があるが、『故紙堆』の収録範囲はそれらよりも広い。本書の魅力はまさにそこに存在し、使い道もそこにあると考えている。

ただし、資料図録として本書を見るとき、物足りない点もある。まず各巻とも目次がないので、どんなものが載せられているのかが、見通しにくい。もともとは、見て楽しむための図録なのだからそれでいいということなのだろうが、とくに、総類にはいろいろなものが集められているので、目次なしではたいへん不便である。また、個々の資料には、簡潔な命名をし、年代と寸法が附されているだけで、なんの説明も加えられていないし、総説的なものもない。「清風」に収められたものについては、そちらにそれなりの説明はあるのだが、それ以外に著者の手になるなんらかの解説が存在するのかどうかも、今のところ見いだせていない。さらに、なんらかの資料として本書所収の資料を使うとすれば、附されている年代やタイトルの的確さについては、検討が必要なものもあろうし、あるいは、実物なのか、儀礼の際に用いるための模造品なのか、といった点にも注意を払う必要があるものもあろう。[7] しかし、これらのモノが実際にどのように使われたものなのかを知ろうとすることは、旧中国の社会生活全般について知ろうとすることであり、なかなかな努力ではむつかしいであろうと想像できる。

次に、古書市場とそこに出現する資料という角度から見ていこう。最終巻癸集の末に載せられている、収集者の鮑伝江氏の書かれた「与故紙堆結縁」を読んでも、収録されている「故紙」が、どのようにして集められたかについては、書かれていないし、残念ながら、「清風」においても、書かれているのはその紙の内容と、そこから想起される著者の想いのみで、この種の随筆によくあるような、収集にまつわるエピソードは、筆者が目を通したかぎりでは出てこず、氏のコレクションの形成過程についてはわからない。しかし、このような収集が成立した背景の一つとして、昨今の古物市場の発展によって、多数の紙類が市場に出現するようになったことがあろうことは間違いないし、こうした市場の状況は、通りすがりの旅行者である我々にも、目に触れる場面が少なくない。

序跋によれば、鮑氏は深圳に在住のようなので、本書の資料は北京での収集とは必ずしも言えないのであるが、ここでは筆者に経験のある北京の古書市場の状況を書いておきたい。北京における古物市場の現状については、北京市文物局文物市場管理処長の傅公鉞氏の「北京市文物監管市場現状調査報告」（『北京文博』二〇〇二年一期）などの文

献があるので、各種の報道記事も参照しつつ述べていく。[8]

同報告には、二〇〇一年六月から八月にかけての北京市文物局文物市場管理処の調査にもとづき、「経批准実施文物監管的市場」と「未批准」とに分けて、あわせて二一の市場が紹介されている。さらに、「有関飯店賓館及商店内的非法経営文物監管物品」として、二二ヶ所をあげている。[9]最後のグループはさておき、このうち、筆者の知るのは、琉璃廠一帯のものと、潘家園とそれに隣接した北京古玩城、そして報国寺くらいである。それ以外では、この報告の対象外ではあるが、中国で伝統的に盛んな切手・コイン商場でも、エンタイアと関連して、紙に書かれた資料が売りに出されている。規模の大きなものとしては、かつては月壇公園の郵市があったが、後に馬甸橋（北三環路）と北京工人倶楽部（宣武区前門飯店西向かい）に移動した。この数年間は行っていないので、現状は知らない。

まず、北京を代表する古物市場である潘家園であるが、各種の資料によれば、もともと、北京における路上の古物市場は、一九八〇年代に出現し、何回かの摘発のために、天橋、玉淵潭、白橋、勁松と移動して、一九九二年から潘家園に市場が形成されるようになったようである。[10]潘家園は、今日ではすっかり有名になり、日本で発行されている北京のガイドブックにも載せられているほどであるが、筆者がはじめて訪れた一九九四年当時は、現在の市場の位置から言えば西側の壁の外になる華威路の歩道上に店が並んでいるだけであった。商品も古書古物のほかに、古着や家材、古い工具などのガラクタも売られていた。道の東側には古書や骨董が、西側にはガラクタや古着の店があったと記憶している。やがて、規模が拡大した市場は、道の東側にある空き地へと拡がりだして、一九九五年には路上からこの空き地に全面的に移転し、壁に囲まれた市場となっていった。また、営業日も日曜のみから、土日の二日へと増加した。さらに、部分的には大屋根が設けられ、プレハブの店舗も出現するようになって、二〇〇一年九月からはじまった改造では、二階建ての本格的建造物が周囲を取り囲んで、〇二年末から〇三年にかけて店舗が入居開業した。現在では、総面積約五万平方メートルにもおよぶ市場となって、従前の露店市の面影とは大きく異なってきており、全部で三千前後の店が商品を並べ、平均客数一日に五万人という。「報告」には、年商は一億元をこえているとあり、観光資源としての性格も強まりつつある。[11]

一方の報国寺は、これは宣武区の広安門内大街にある寺で、顧炎武を祀った「顧亭林祠」があることで有名であるが、長い間公開されていなかった。「報告」によれば、一九九七年五月に営業許可が出たとあるし、また、『中国文物報』二〇〇三年七月二九日の、秦傑「報国寺淘書六年紀事」には、「一九九七年七月、中国商業出版社の数百万元の投資によって、北京報国寺文化収蔵品市場が対外開放した」とある。筆者は九七年の九月にはじめて訪れたが、ほとんどが切手市だったと、そのときのメモには書いている。「報告」には、コインの交換会などがもとになっているとあるが、たしかに、現在でも堂内を含めてコインの店が多い。元来は、一部が堂内を利用していた以外は、まったくの露店だったのが、現在では境内にプレハブの店ができるようになっている。「報告」では、プレハブの店舗数は三〇余り、露店が七〇余りということである。また、ここではしばしば収集交換会やオークションが開かれており、新聞記事になることがある。

こうした古物市場で売られているものは、陶磁器、玉器、木製品、古家具、家材（欄間や扉）と多岐にわたっているが、書籍類については、日本の多くの場合と同様に、ほとんどが新刊書の古本であり、線装本や各種の「紙」を扱うのは一部分の店舗である。扱われている「紙」のものの商品の種類としては、地図は当然として、地契、証照、債券、股票の類はしばしば見かける。価格は、経済発展に連動して高価になりつつあるようで、かつては一山で売っていたものが、一枚一枚に値が付けられて、日本の古書店のようにクリアファイルに収められるようになってきている。

中国における古物市場は確実に拡大し続けている。そのことを示す証左の一つが潘家園市場の膨脹だが、別の角度から例を挙げると、各種の誌紙が「収蔵特刊」を設けていることからもそれを知ることができる。中国を代表する文化財関係紙である『中国文物報』ですらそうであり、手もとにある『中国古旧書報刊収蔵交流指南』（種福元主編 上海古籍出版社 二〇〇二）によれば、驚くほど多数の雑誌や新聞、しかも誌名から見る限りは、とても古物収蔵とは縁のなさそうな誌紙が、「特刊」を掲載している。

目的が愛玩であれ、研究であれ、投機であれ、市場の発展は退蔵されている文物の市場への流入をもたらす。昨今の中国では、さまざまなレベルのオークションが開かれており、たとえば宋元版のような文物的、経済的価値の高い

ものは、「大拍」と呼ばれる高級商品を扱うオークションに出品され、それぞれの拍売ごとに写真の入った目録が刊行、発売されているほか、『中国拍売古籍文献目録　一九九三―二〇〇〇』(姜尋編　北京図書館出版社　二〇〇一)、『中国古旧書刊拍売目録　一九九五―二〇〇一』(姜尋編　北京図書館出版社　二〇〇二)、『中国古籍文献拍売図録　二〇〇一―二〇〇二』(姜尋編　北京図書館出版社　二〇〇三)のような、その結果の集成もあるから、そこに掲載されることもあるだろうが、本書が取りあげているような雑多な資料については、マニアの世界の情報として、上記のような「収蔵特刊」の類や、『東方収蔵』や『旧書交流信息』のような専門紙誌に記事が載る程度である。『故紙堆』が、その対象とする範囲の広さを特徴とするというのは、こうした事情による。

もちろん、二〇〇三年一一月に催された東京古典会大市に「清朝契約文書」として出品された一群の清朝から民国にかけての資料のように、[12] 戦前にもたらされたものが我国にも存在しており、いくつかの図書館の蔵書目録にはそうした資料が著録されてはいる。しかし、古物市場にこうした資料が、再度出現するようになった現時点においては、文物法規の規定もあり、これらの紙類の「実物」を中国から我国に新たに招来することは、清朝以前の物については将来ともに困難であると考えられる。例えば、上記の「大拍」の目録を見ても、我々の関心を引くようなもののほとんどには、海外持ち出し禁止のマークが付いている。そうした角度から言えば、『故紙堆』のような図録が今後とも出版されて、各種の資料の図版が提供されていけば、有用である。そして、これまでに述べてきたような、古物市場の発展と人々の関心の増加によって、各種の資料が発掘・紹介され、それがより深く文献を読むための支えになってくれることが期待される。

注

(1)　本書には、無署名の前言と、張海鵬(中国社会科学院近代史研究所所長・中国史学会副会長)、楊冬荃(国家檔案局副局長)の二氏の序文と、無署名の「前言」が掲載されている。

(2)　「中国芸術新聞網」というサイトの「中国当代美術家図録」で、氏の作品や略歴を見ることができる。

(3)　ちなみに、『故紙堆』にも捷報が載っており、別稿で紹介する予定でいる。

（4）　例外としては、徽州文書と上海図書館所蔵宋版『王安石文集』紙背文書（『宋人佚簡』　上海市文物管理委員會・上海博物館編　上海古籍出版社　一九九〇）がある。また、竺沙雅章氏の「漢籍紙背文書の研究」（『京都大学文学部研究紀要』一四　一九七三）が、国内の漢籍紙背に残された文書について精査している。

（5）　奈良大学の図書館にも、台南地域の清代から日本統治下にかけての土地文書数百枚の写真焼付けがある。また台湾では、「古文書専輯」と題した圖録や資料集が、各地区で出版されている。たとえば、『草屯地区古文書専輯』（台湾省文献委員会　一九九九）など。

（6）　この資料集については、各輯について「美国亜洲学会台湾研究資料専刊」の一部として目録が刊行されているので、内容を知ることができる。筆者が確認したのは、一から四輯で、台北の環球書社の発行となっている。最近のものでは、『台湾社会生活文書専輯』（洪麗完編　中央研究院台湾史研究所籌備処　二〇〇二）が、家族関係資料を集めていて、婚姻関係などで、他の資料集とは異なる種類の文書も収録されている。たとえば、養子関係の文書の中に、子供を神様の養子にする「誼子」の文書が含まれているのは、宗教関係資料と言える。

（7）　例えば、丙集三頁の「萬暦四五年の墓図」に書かれている年号は、後代の人が墓石の文字を写したもののように見えるし、同八七頁の「太虚幻境図」は、タイトルはたしかにそのとおりだが、いわゆる「陞官図」の類で、しかも『紅楼夢』をテーマにしたものではないだろうか。もちろん「陞官図」が民俗の項に載っていても差し支えはないのだが。

（8）　『北京文博』には、その他にも文物市場に関して、于平「文物市場開放与管理問題研究」（二〇〇二年二期）、北京市文物局文物市場管理処「拓寛文物流通渠道推進文物市場発展」（二〇〇三年一期）、などの文章が掲載されている

（9）　「報告」に挙げられた「市場」は次のとおり。

経批准実施文物監管的市場

北京古玩城（朝陽区勁松橋）、紅橋市場旧工芸品部（崇文区天壇東門）、栄興芸廊（宣武区琉璃廠西街）、亮馬河収蔵品市場（朝陽区燕莎中心東側）、兆佳朝外旧貨市場（朝陽区華威北里）、海王村工芸品市場（宣武区琉璃廠東街）、琉璃廠文化街（宣武区琉璃廠）、潘家園旧貨市場（朝陽区潘家園）、北方民用廃旧品交易市場（石景山区八宝山）、古玩城雅宝路市場（朝陽区日壇西門）、荷花古玩旧貨市場（西城区什刹海西岸）、大鍾寺旧貨市場（海淀区北三環路）、徳勝門銭幣市場（西城区徳勝門）、北京華声天橋民俗文化城（朝陽区左安路）

未批准経批准実施文物監管的市場

報国寺文化工芸品市場（宣武区報国寺）、北京中商和衆旧貨総合交易市場（朝陽区双龍南里）、甘露園百姓物品交易市場（朝陽区甘露園）、鴻六福工芸品市場（宣武区大栅欄）、麗都

飯店東側市場（朝陽区将台路）、居庸関旧貨市場他（長城地区）、朝陽区十八里店村

(10) 人民網・北京風物の「潘家園、延伸着一条古玩旧貨的流通路線」（執筆時期不明）や、朝陽区文化委員会・朝陽文化網の「網上潘家園」の記載による。

(11) 『中国文物報』二〇〇一年九月一九日の「潘家園改拡建工程動工」、上記の網上潘家園の「潘家園旧貨市場改造工程進展順利」（二〇〇一年一二月一一日）、『北京晩報』二〇〇一年九月六日「投資両千万北京潘家園旧貨市場今起改造」（新浪網による）、『北京現代商報（電子版）』三八七期（二〇〇三年九月一日）「古典式建築環境営造文化氛囲潘家園旧貨市場客流増長両成」などによる。

なお、潘家園は整備後、全体をいくつかのブロックにわけ、主たる取扱商品によって区分されている。どのような商品が主に扱われているかを知っていただく手がかりとして、市場の入り口にある掲示板にしたがって紹介しておく。なお、商品の表記は掲示板のものをそのまま転記した（二〇〇三年一〇月の調査で撮影した写真による）。ただし、現実にはその間に多数の露店が出ているし、必ずしもこのとおりというわけではない。古玩の店の中にも、書物や紙のものを一緒に並べている店は多い。

一区（大屋根西北）　玉翠、瑪瑙、珍珠、水晶、書画
二区（大屋根東北）　古玩、雑項、民間旧物
三区（大屋根西南）　木雕、佛教用品、服飾
四区（大屋根東南）　陶瓷、銅器、紫砂、奇石
甲区（北側）　古玩、雑項
乙区（東側）　字画、旧書刊
丙区（南側）　一層　古玩、雑項
　　二層　字画、旧書刊
丁区（西側）　古玩、雑項

そのほかに、さらに西側に南北に長い古典家具区がある。

(12) この資料は、下見展観図録に「一八〇七　清朝契約文書」として登載されていたものであるが、会場で実見したところでは科挙関係資料なども含まれており、大量かつかなり多岐にわたるものであった。

本稿は、科学研究費特定領域研究「東アジアの出版文化」計画研究「中国近世の知識人社会と出版文化　とくに科挙関係資料と類書を中心に」の、平成一五年度の成果の一部である。このような現地での情報を踏まえた報告を書くことができたのは、なによりも筆者を路上の露店時代の潘家園にいざない、その後も絶えず現地情報をお送りくださった、櫻井澄夫氏のおかげである。また、本年度の現地調査におつきあいくださった、浅井裕理、舩田善之のお二人にも感謝の意を表したい。